ねがい ひろがる 教育実践

神戸大学
川地亜弥子

かわじ　あやこ／研究テーマはわかる・楽しい・感動のある授業づくり、安心できる集団づくりについて。編著に『実践、楽しんでますか？―発達保障からみた障害児者のライフステージ』（クリエイツかもがわ）など。

最終回　楽しい節目をつくりだす

いよいよ最終回。今回は「節目を楽しむ」ことについて考えてみます。学びや労働の場には、たくさんの節目があります。学期末、年末、年度末だけでなく、行事もよい節目になります。ただし、行事では普段とちがう経験をするため、本人も家族も不安になります。

「～すべき」でがんじがらめにしない

4月号で紹介した、長く不登校で潔癖だったよしとくん。5年生の1学期の中盤、2泊3日の宿泊学習の前に不安になりました。お母さんからも「心配がっています」との電話が。この時、担任の小松さんは「大丈夫ですよ。お家でも『大丈夫だよ』と言ってくださいね」とお願いしました。その頃、まだ朝には起きにくかったよしとくんが、みんなと同じバスに乗れるといいなと思っていた小松さんは、朝に来られるように、ということはお母さんにお願いしました。

小松さんは、クラスの他の子どもたちが4年生の時に宿泊学習を経験していることもあって、「～してはいけません」という注意はほとんどしませんでした（旅行のしおりにも書いてありますしね）。「まくら投げ、楽しいぞ～。でも夜さわぐとよくないんや」「お風呂で水かけあうのも楽しいぞ～。でも次に他の学校が入る時はぬるくなってしまうからちょっとな…」と、楽しい（ちょっと羽目をはずせる？）話をしました。子どもたちは「昼にまくら投げしたらいいな！」「うちの学校が最後の時は水かけあってみたいな！」と思ったことでしょう。

よしとくんは朝のバスに間に合い、心配していた係活動も無事に終えました。潔癖なのでお風呂は無理かなと小松さんは思っていました。2晩くらい入らなくても問題ないと思ってもいました。みんながお風呂に入っている時、よしとくんと「みんなの様子見に行こうか…」という話になり、お風呂場の前まで行くと、作戦大成功と言うべきでしょう、どうも水をかけ合って騒いでいるようです。よしとくんは「…やっぱり入る」と言って、自分の部屋に着替えとお風呂の道具を取りに戻り、入りました。

学校の行事で大事なことは、日常とはちがう経験ができることです。ただ、それが「～すべき」「～すべきではない」とがんじがらめになっていると、とても息苦しいものになります。こんなことやってみたい、と楽しい想像がひろがるようにしたいものです。それは個人の中で広がるだけでなく、みんなで話したり、少しやってみたりするなかで、みんなで広げていくものでもあります。

3学期になると、よしとくんは友だちと誘いあって銭湯に行くまでになりました。2～3日に1日くらい学校を休んでいましたが、放課後の世界が広がり、クラスの友だちと「タオルだけでええねんな～」と言いながら銭湯へ行き、その様子を日記に書いてくるようになりました。

保護者の思い

普段とちがう生活になる時には、よしとくんのお母さんだけでなく、多くの保護者は心配になります。埼玉の特別支援学校で教員をしている鈴木こずえさんの記録に、「修学旅行は行けません」と告げてきたお母さんが出てきます。時間通りに来ることには困難がある青年で、鈴木さんは時間通りに飛行機に乗れなかった場合の対応も具体的に検討していることを伝えました。もう少し話していくと、保護者から「迷惑をかけるから行きませんと言いましたが、本当はちがうんです。今頃迷惑をかけているだろうと私が嫌な思いをするのが嫌なんです。私が行かせたくないんです」と涙ながらに語り、鈴木さんも涙したといいます。

うちの子にとってよい経験の場になるとは思っていても、うまくできなかったらどうしよう…という不安。その場にいられないからこそ、保護者はより強く不安になります。その思いによりそい、「うまくいかないことがあっても、大丈夫」「全員にとって、失敗すること、試行錯誤することを含めての学びですよ」と伝えていくことが大事になります。普段の生活なら任せられても、こういう時には…と不安になっている保護者に、「今回も任せてみよう」と思ってもらえるような働きかけが大事になります。

学校で楽しい経験をもってほしい

大阪で長く教員をしてきた大島悦子さんとこゆきちゃんのエピソードは、子どもが自分で節目をつくり出しねがいを実現していくこと、しかも友だちと実現していくことの大事さを改めて教えてくれます。

こゆきちゃんが2年生の時に大島さん